

学校訪問記 特色ある教育を行う学校

教科エリア型校舎と3ステージ制

学校法人総持学園
鶴見大学附属中学校・高等学校

鶴見大学附属中学校・高等学校

学校法人総持学園鶴見大学附属中学校・高等学校は、大正13年に設立された光華女学校を起源とし、以来、80年余り、女子教育に力を注いできましたが、平成20年、学校改革の一環により、男女共学校として新たにスタートしました。



耐寒参禅会の様子

本校では、仏教、特に禅の教えにもとづいた教育を実践しており、例えば、毎朝全校一斉に行う「黙念」により、心を落ち着け、集中力を高めて授業に臨むことができます。また、毎年1月に隣接する總持寺において開催される「耐寒参禅会」には、多くの生徒が参加します。この参禅会には、多くの保

護者も参禅を希望し、参加していることから、本校教育の理解を得る好機となっています。

【教科エリア+ホームベース型校舎】
本校の大きな特色の一つは、「教科エリア+ホームベース型校舎」（以下「教科エリア型校舎」）です。

校舎の老朽化に伴う建て替え計画が持ち上がった際、当時の校長から『きれいな校舎』というだけではなく、特色ある学びを体現した特色ある施設をつくるべきである。」という方針が打ち出されました。そして、全国の高等学校の特色ある校舎を見学した後、各校舎を分析し、研究を重ね、平成21年、現校舎が完成しました。

教科エリア型校舎導入に伴って、新校舎にふさわしい、ワクワクする学びのスタイルとなるようプロジェクターや書画カメラの全教室配備、貸与用のノートパソコンの導入といったハード面・ソフト面の整備を行いました。

本校の教科エリア型校舎は徹底しており、全ての教科が専用の教室を備えています。各教科に適した環境・設備のもとで授業を行い、授業の質を高めることが可能となっています。

一方、授業を受ける生徒にとっては、

生徒自らが教材を携えて教室を移動し授業を受けることから、学ぶ心構えを整えて、主体的に授業に取り組むことで力を引き出すことができます。

本校の場合、教科専用の教室だけではなく、「ホームベース」と呼ばれるクラス別の教室も配備しています。毎朝の朝礼（黙念・読経・聖歌）、昼食、ホームルーム活動などで、生徒たちは自分のホームベースに集います。授業時間中は使われないホームベースですが、生徒たちの「居場所」として安心感を生み出し、人間力を形成する拠点として、不可欠な空間となっています。



教科エリア型校舎 数学教科教室

教員の「居場所」にも特色があります。教員は、教科エリアの「研究室」と呼ばれる空間を拠点としています。同じ教科の教員が一つの部屋に集まることで、お互いの授業内容や教授方法などについて報告し、これまであまり共有できていなかった反省を生かして

改善を図り、授業の質を高めることで教育力の向上を実現しています。

研究室を拠点とすることで、教科外の教員同士の接点は少なくなりますが、タブレット端末等を活用することで、様々な情報の共有を図っており、出勤状況や連絡事項なども、随時随所で確認できる体制が整っています。

なお、本校ではいわゆる職員室に相当する「校務センター」も配備しており、全教員が、始業前、終業後に集まって、打ち合わせ等を行っています。

【3ステージ制6年一貫教育】

本校は、6学年を2学年ごとに区分した「3ステージ制」を採用しています。スモールステップで、生徒たちに成長を実感してもらうことが狙いです。

また、学校運営上の狙いもあります。3ステージ制導入前は、学年間の個性に応じた指導となっていたことがまま見受けられましたが、学年間のブレを避け、学校として一貫性のある教育を実施する必要があると考えました。そこで、各学年の学年主任とは別に、1ステージつまり2学年を統括する「ステージ主任」を各ステージに配置することとし、おおよそ5、6年の間同じステージを担当する体制としました。学年制のみで運営していると、例えば、教員によっては、高校3年生の担当として大学入試に対応する授業を行った翌年、小学校を卒業したばかりの中学1年生を担当することが起こりえます

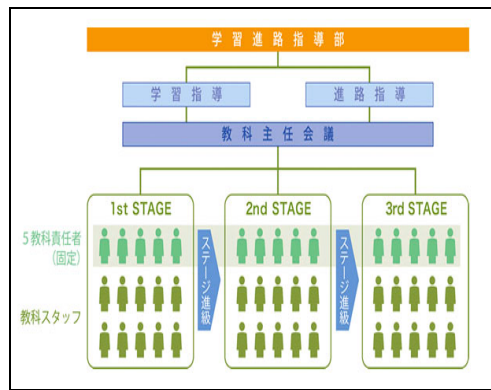
が、このような事態は教育効果的にベストではないと考えています。そのステージのスペシャリストを育成し、配置することで、学校としての指導の質を一定以上に保ち、さらに向上させることができると考えています。

ただし、担当教科や教員の年齢構成などにより、ステージ主任として固定させるべき教員の確保が今後の課題です。

【教科指導力・生活指導力の向上】

本校の学習指導・教科指導は、学習進路指導部が行っています。学習指導計画を担当する部署と進路指導や模擬試験を担当する部署を統括し、かつ、教科主任よりも上席に設定することで、学習指導と一体となった安定感のある進路指導を実現することが可能となります。例えば、授業計画を模擬試験の出題傾向と比較し、授業の進捗の見直しが必要と判断すれば速やかに改善を図ることができ、この体制のメリットの一つです。3ステージ制において前述したように、学習進路指導、生活指導とも、そのステージのスペシャリストとして、教員を固定的に配置させることにより、学校としての教育力、指導力の水準を一定以上に保ち、さらに向上させることを狙っています。生活指導面においては、例えば、中学2年生で起こりがちな事象はおおよそ把握できているため、数年ぶりに中学2年生を担当する教員よりも、中学

2年生対応のスペシャリスト教員に担当させたほうが、学年特有の課題に速やかに対応し、的確な指導を行うことができます。

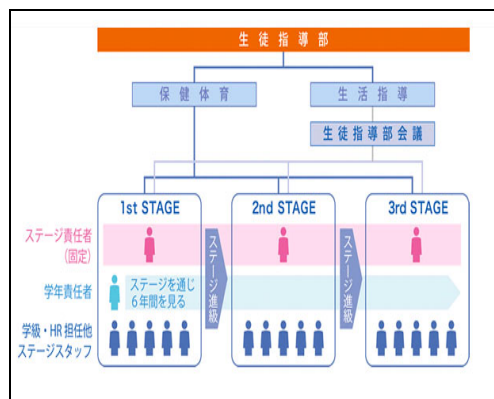


学習進路指導部イメージ図

【積極的な研修参加】

21世紀の未来も、子どもたちを導くのは人、つまり教職員です。21世紀型の教育者たるべく研修体制を整え、教員の研修機会を増やしています。また、研修への参加に積極的な教員とそうでない教員との間に情報の乖離を起さないためにも、教員研修委員会の管理のもと、教員が計画的に研修に参加できるように努めています。校内の教員を世代別におおよそ4つのグループに分け、それぞれのステージに適した校内及び校外の研修に、一人、年間3回以上参加するように促しています。研修後は、職員会議や教科単位の組織の中で、概況報告を行うなど、適時適切

な情報共有に努めています。さらに、保護者に対しても教職員の研修活動について、「学校たより」を通じ情報を発信しています。本校の教員の積極的な研修活動に関しては、保護者からも大いに賛同を得ています。



生徒指導部イメージ図

【中長期計画について】

本校では「クレイン翼プロジェクト」という学校改革のための中長期計画（2015年2024年）を策定しています。

計画策定のスタート時点では、「教育ビジョン」について、ゴールとしての将来像や、実現のための方策などは明確ではありませんでした。そこで、まず、法人の担当者が、全教職員に学校のSWOT（強み、弱み、機会、脅威）分析を提出してもらった上で、「この学校にどんな思いをもっていか」をヒアリングし、分析しました。次に、分

析結果を踏まえ、校長をはじめ管理職相当の教職員により、「目指すべき将来像」、「施策の分野と目標」を明確にしました。そして、それぞれの施策について、分野ごとに目標や方策、優先順位を話し合い、工程表に落とし込んでいきました。この一連の作業を通じ、教職員一人ひとりに当事者意識が醸成され、全校一体となって学校改革に取り組む気運が生まれました。

なお、目標を可視化したこと、また、年度末に1年間の進捗の確認及び総括を行うことで、教職員それぞれの意識が高められ、大半の計画が予定より早く進めることができています。

【取材を終えて】

本校は、明確な将来ビジョンのもと、全教職員が目標を共有しながら学校運営を行っています。教科エリア型教育、3ステージ制、いずれも教育システムとして徹底していますが、それは、「教育効果を最大限に高め、より質の高い教育を生徒たちに提供したい」という目標が共有されているからこそ、全教職員のエネルギーが一体化し、「徹底」が実現できていると感じました。また、「徹底」が、教員一人ひとりに「スペシャリスト」としての責任感と自信をもたらしていることがうかがえました。中長期計画の実現に向けた取組みが、教育力の強化の好循環に貢献していることを実感させる事例といえます。

（取材）私学経営情報センター